

# ミュージアム 通信

## 寒さに凍え、 それでも愛でた 江戸の冬

[小企画]

新春企画 — 限定ミニ展示のご案内  
江戸・明治期の「籠」細工

[かわら版]

講座のご案内



「時世粧菊揃 つじうらをきく」(部分)・—勇齋国芳 画・国立国会図書館所蔵

## 寒さに凍え、それでも愛でた江戸の冬

江戸のあったかアイテム  
霜月(旧暦十一月、新暦十二月)半ばを過ぎて、一年で最も日の短い冬至を迎えれば、まもなく寒の入りである。江戸に初雪が降るのもこの頃で、いつさいを白く覆い尽くす雪に魅せられた人々が、雪見に興じる季節が到来する。冬の寒さはいや増し、いよいよ極月(旧暦十二月、新暦一月)、江戸に厳冬が訪れる。

今どこを暖をとるための手段は豊富だが、当時の暖房器具といえばせいぜい火鉢か炬燵・行火・湯たんぼ・温石・手焙くらいで、部屋全体を暖められるような器具はなかった。これらの熱源から部分的な温もりを得られはしても、エアコンにヒーター、床暖房、保温性肌着などの恩恵を受けている現代人にしてみれば、江戸時代の冬はなんと耐え難い寒さであったろう。

江戸の町々で炬燵の準備が始まるのは、本格的な冬が来る前の旧暦十月初めの亥の日である。これを炬燵開きといい、この日を境に火鉢や炬燵を使い始める習わしとなっていた。

### 一度入ると出られない…それが炬燵

さて、炬燵には二種類、掘炬燵と置炬燵がある。そもそも炬燵の起こりは室町時代とされ、囲炉裏の上に櫓を組み、そこに布団を掛けたものだったという。江戸時代には床を掘り下げて炉を設け、床上に櫓を置く「掘炬燵」



置炬燵(行火)で暖をとりながら雪見酒に興じる女性。  
「雪見八景 晴嵐」・初代豊国画・国立国会図書館所蔵

式に至る。我々がイメージする掘炬燵そのものだ。一方の置炬燵は、言わば現代の電気コタツで、中に火入れ(火種)を入れて置く(容器)を置き、その上に櫓と布団を乗せた。可動式のため利便性は高く、これを小型化したものが前述の行火である。

左掲の初代豊国画「雪見八景」の中に置炬燵(あるいは行火か)が見える。江戸の雪見の名所のひとつ隅田川堤は、時季になると屋根船に乗って川へ漕ぎ出し、雪景を愛でる客人で賑わった。『絵本風俗往来』によれば、「障子

船に棹をささせて、障子の内には置炬燵、絶品の女子声静かにささやき、隅田川の兩岸の雪景を賞し」とある。障子船とは川遊びに用いる障子貼りの屋根が付いた小形船のこと。雪に包まれた墨堤はさぞ美しかろうが、寒さは言うに及ばず、置炬燵や行火が必需品だった。

### 猫も丸くなる長火鉢

炬燵同様、江戸の町屋生活に欠かせなかった火鉢。落語の中にもよく出てくるが、今号表紙の「時世粧菊揃」に描かれたような長火鉢が、寛政以降(一七八九)、江戸庶民の生活用具として普及したと言われている。その用途は暖房に限らず、湯を沸かしたり酒を燗したり夕餉の鍋を煮たりと、炊事具としての機能も兼ねた。余談だが、江戸庶民に親しまれた鍋料理に「小鍋立て」というひとり鍋がある。大きな鍋を皆でつつくのではなく、小



長火鉢で徳利・鍋・鉄瓶を熱している。  
「江戸名所百人美女 日本はし」・三代豊国画・二代国久画・東京都立中央図書館特別文庫室所蔵

### 冬の装い

#### どてら・半纏・袖頭巾

ダウンコートの暖かさにはとても及ばないが、江戸庶民のアウトターといえどどてらと半纏である。『守貞漫稿』に「寒風の時専ら衣服の表に重ね着し」と紹介されるどてら(京坂では丹前(たんぜん)の名で呼ばれる)は、綿入れの袖あるいは木綿製で、縞模様为主流と記す。同じく半纏に關しても「寒風の禦(防)ぐの意」として着用すること、さらにこちら綿入れの縞模様に縮緬や紬・木綿製が主で

あったことを述べている。

これらに加えて、頭部の

防寒具として袖頭巾がある。左掲の芳虎画「隅田川

雪見」では、弁慶縞の半纏

を着込み、袖頭巾を被つ

た女性を描く。袖頭巾は

別名「御高相頭巾」ともい

うが、着物の袖口から顔

を出すように被ることか

らこの名が付いた。本図

の女性は、頭巾の上から

さらに首の辺りを手拭で

結んでおり、これはより

保温性を高めるためで、

このように頭巾を着用する

人は珍しくなかった。な

お、袖頭巾は女性の防寒

アイテムであり、男性が

被ることは稀だったという。

**冬は冬らしく…**

限られた暖房と防寒着

で凍てつく冬を過ごした

江戸の人々。彼らにとって

春の訪れは、我々が思う以

上にありがたいもので

あったことだろう。江戸の

粋人にならって薄着を勧

めるつもりはないが、寒さ

に凍えながらも雪を愛で、

冬を満喫した昔人に教え

られることは少なくない

のではなからうか。



「隅田川雪見」(3枚続の右)・芳虎 画・国立国会図書館所蔵

### ■辰年新春企画―限定ミニ展示

## 江戸・明治期の「龍」細工

2012年1月21日(土)～2月26日(日)

### ■同時出陳・

### 江戸「お細工物紙入」

新春企画と同時に、

江戸の粋な遊び心と

豊かな発想力に溢れ

た紙入を紹介します。

折りたたまれた紙入

を開き、組み立ててい

くと、御座船が完成す

るといふ驚きの細工

物。縮緬や金襴、押絵

などを用いて作られ

た本資料も、当期限定

で公開します。

卯年も残りわずかとなり、年が明ければ辰が控えています。

紅ミュージアムでは、

新春企画として、来年の

干支「辰」にちなんだミ

ニ展示を行います。

煙草入れや懐中鏡入れ

などの袋物に見る「龍」の

意匠細工には、江戸・明治

期職人の高い技量が惜し

みなく注がれています。

なかでも今回の注目資

料は、左掲のミニチュア煙



根付部分1.5cm×1.7cm

根付部分・拡大



百合手金唐革煙草入れ・其角堂コレクション

※このほか数点展示予定(常設展内の一部で展示を行いますので観覧料は無料です)



紙入とは、懐紙や鼻紙などを入れた袋物の一種。写真は組み立て後の完成形(お細工物紙入・当館所蔵)

注目の若手作家・森奈保美さんとのコラボレーション紅器

# 小町紅『彩華』

2011年12月1日(木) 数量限定発売

日本初の磁器生産地・有田。この歴史ある地で学び、制作活動を行う注目の若手作家・森奈保美さんとのコラボレーション紅器・小町紅『彩華』が、このたび誕生いたしました。

デザインは全四種。分業体制にある有田焼の世界において、染付や色鍋島、赤絵、金彩を施した金襴手など、一人ですべての絵付を行いました。幻の名品といわれる「明治伊万里」など、古典のエッセンスを取り入れた作風は、いづれも繊細なタッチと華やかな色彩で、思わず手に取りたくなる逸品ばかりです。

「有田焼絵付師・森奈保美プロフィール」一九七〇年生まれ。二〇〇四年有田産業大学校絵付科に入学。卒業後、日本での現存数が少なく幻の名品といわれる明治中期の有田焼「明治伊万里」を復刻するプロジェクトへ参加。このプロジェクトを通じて絵付の世界に魅了されることとなる。伝統的な「手仕事」による有田焼の素晴らしさを、学び、受け継ぎ、後世に残してゆくことに熱い思いを持ちながら、現在はフリーで作品を発表している。

若手作家が生み出す有田焼と「紅」。この二つの伝統が織りなす優美な世界をお楽しみください。また、今回の小町紅『彩華』



■上/小町紅『彩華』色絵三瓢文 31,500円(税込)  
■下/小町紅『彩華』染錦金彩唐草文 27,300円(税込)

## Information

## かわら版

### 講座のご案内

#### ■「暮らしを彩るふるしきの包み方講座」

日本人の日常生活の中で慣れ親しまれてきた包みの文化「ふるしき」。お決まりの包み方も、ちょっとしたコツで格段に使い勝手が変わります。実用的な普段使いのものから、バレンタインや新たな門出を祝うギフト用の華やかなものまで、今すぐ活用したくなる包み方をご紹介します。

講師：日本風呂敷協会 東京支部 大工原 智子氏

2012年1月21日(土) 14:00~16:00 ■定員：8名 ■参加費：1,500円 ※当日お着物で参加の方は500円引き

※ご予約は紅ミュージアム(03-5467-3735)まで。



### 「工藝の再結晶」展、観覧料寄付についてのご報告

十種香箱復元制作プロジェクト報告展「工藝の再結晶」(2011年10月1日~30日開催)の観覧料収益全額229,800円を、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団の東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業(文化財レスキュー事業)に寄付いたしました。ご来館くださった皆様に、心より御礼申し上げます。

## Since 1825 伊勢半本店 紅ミュージアム

●開館時間/11:00~19:00 ●休館日/毎週月曜日  
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735  
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehanhonten.co.jp>